副詞ナカナカの意味と用法

言語学・応用言語学専攻

1LT07070S

2007（平成 19）年入学

竹内　絵里

2011（平成 23）年 1 月提出

要旨

本論文では、副詞ナカナカの新たな意味と用法を提案する。服部(1994)、丁(2009)などをはじめとする先行研究では、ナカナカは、否定表現と共起する用法と肯定表現と共起する用法の二つに分類されている。しかし、本論文では、ナカナカが否定形「～ない」と共起するときには、新たに「時間」との関わりを述べるべきであると主張し、ナカナカが肯定文で用いられるときには、見くびった評価を含む場合と、見くびった評価を含まない場合とがあることを指摘した。特に、ナカナカが肯定文で用いられており、かつ、見くびった評価を含まない、という例は、先行研究で指摘されることのなかった新しい用法である。さまざまな例文をもとに、副詞ナカナカの新しい意味と用法の分類を提示した。

目次

1.はじめに **1**

2.先行研究 **1**

2.1.服部(1994) **2**

2.2.丁(2009) **2**

2.3.井手(1955) **3**

2.4.その他の先行研究 **4**

3.主張 **4**

4.分析 **5**

4.1.否定形と共起するナカナカ **5**

4.2.肯定文と共起するナカナカ **8**

4.2.1.見くびった評価を含む例 8

4.2.2.見くびった評価を含まない例 12

5.肯定文と否定文の両方で使われるナカナカ **14**

6.まとめ **16**

参考文献 **18**

1.はじめに

我々は、普段の会話や文章の中で、さまざまな副詞を使っている。その副詞の中には、否定形の「～ない」と共起する場合と、肯定文で用いられる場合によって、意味や用法が異なるものがある。本論文では、その中でも、ナカナカというものに注目し、従来、記述されてこなかった用法があるということを指摘する。

『大辞林』では、ナカナカには二つの意味と用法があるとされている。

(1) a. 否定形と共起する場合には、「思ったとおりには。容易には。」という意味で使われる
b. 肯定文で使われる場合には、「思っていた以上に。かなり。ずいぶん。」という意味で使われる [大辞林: p.1899]

(2)は、ナカナカが否定形と共起する例、(3)は、ナカナカが肯定文で使われる例である。

(2) a. この事業計画は、なかなかスケジュール通りに実行できない。
b. 今月の目標はなかなか達成しない。

(2a)では、ナカナカが否定形の「ない」と共起し、事業計画が思った通りには容易に実行されない状況を表し、(2b)では、今月の目標が思った通りには容易に達成されない状況を表している。

(3) a. このケーキはなかなかおいしい。
b. このデザインはなかなかいい。

(3a)では、ケーキが思っていた以上においしいという状況を表し、(3b)では、このデザインが思っていた以上に良いという状況を表している。

今までの先行研究では、上記のように、「予想」や「程度」という考え方を用いて、ナカナカの意味と用法を二種類に分けて論じているものがほとんどである。これに対して、本論文では、この二種類の用法にはおさまりきらないナカナカの用法があるということを述べ、さまざまな例文を取り上げながら、副詞ナカナカの特徴を明らかにしていく。

2.先行研究

ナカナカを取り上げた先行研究では、否定表現と共起する場合と肯定表現と共起する場合で意味と用法が異なるということを述べているものがある。以下では、特に、服部

(1994)、丁(2009)、井手(1955)の内容を具体的に紹介する。

2.1.服部(1994)

服部(1994)は、ナカナカを否定形と共起するものと、そうではないものに分け、それぞれに別の意味と用法があるとしている。

一つ目が、否定形と共起し、「なかなか P ない」の形で、期待される事象 P の成立を容易に見ることができないことを表す用法である。

(4) a. 待っているのになかなか来ない。 [服部 1994: p.79, (3)]
b. 年末にひいた風邪がなかなか治らない。 [服部 1994: p.79, (4)]

(4a)では、「来る」という、期待している事象の成立が容易ではないことを表し、(4b)では、「風邪が治る」という、期待している事象の成立が容易ではないことを表している。

二つ目が、広義の程度性を有する述語 P を限定して、見くびれない（軽く評価して済ませられない）程度に P であるということを表す用法である。

(5) a. なかなか興味深い経験だった。 [服部 1994: p.80, (7)]
b. こう見えてなかなか頭はいいのだよ。 [服部 1994: p.80, (8)]

(5a)は、「見くびれない程度に興味深い経験であった」ことを表し、(5b)では、「見くびれない程度に頭が良い」ということを表している。「見くびれない程度に」という記述があることから、本当は見くびって評価していた、といえる。

2.2.丁(2009)

丁(2009)でも、ナカナカは否定表現とも肯定表現とも共起し、否定表現と共起するナカナカを陳述副詞、肯定表現と共起するナカナカを程度副詞とし、そのどちらと共起するかによって、異なる意味と用法を持つと記している。

(6) この事件のなぞはなかなか解けない。 [丁 2009: p.13, (2)]

丁(2009)で、(6)はナカナカが否定表現を伴う場合の典型的な例とされており、意味と用法を(7)のようにまとめている。

(7) ナカナカが否定表現を伴う場合 [丁 2009: p.18]
ある事件・事態が起こる蓋然性を表す。話し手の予想や期待と実状を比べ,

話し手が願う事態・状況の実現・実行が容易でない場合を表す。その実現・実行に至るには何らかの困難を伴い，すぐにはそのような状態に達しないことを表す。実状と予想・期待との不一致や不整合の場合，マイナス評価として働く。

つまり、(6)は、期待していたよりも、この事件の謎が解けるのは容易ではない状態を示していると解釈できる。

また、丁(2009)では、ナカナカが肯定表現を伴う場合の典型的な例を(8)としている。

(8)　二人はなかなか仲がいい。　[丁 2009: p.13, (1)]

典型例である(8)の意味と用法を(9)のように分析している。

(9)　ナカナカが肯定表現を伴う場合　[丁 2009: p.19]

ある事態の状態が含む程度性が普通以上であること，予想や期待を上回ることを表す。ある行為の結果としての状態の完成度の高さに対する評価を表し，予想・期待以上にいい場合はプラス評価につながり，予想・期待以上に悪い場合はマイナス評価につながることを表し，程度が著しいことを表す。

(9)の考え方をもとにすると、(8)は、予想を上回って、二人の仲がいいという解釈ができる。また、「ある事態の状態が、予想や期待を上回る」とあることから、話者の予想や期待が、対象を見くびったものである、と言える。

2.3.井手(1955)

井手(1955)の先行研究より、ナカナカは、古代前期において、万葉集の歌の中に、副詞としての「なかなかに」という形で現れたことがわかっている。そして、それは、「中々爾」「なかなかに」の二通りのみで書かれていることから、その構成が「中中」であることが察せられる。(10)、(11)は、万葉集の中で、ナカナカが使われた例の一部である。

(10)　なかなかに人とあらずは酒壷になりにてしかも酒に染みなむ

〈訳〉中途半端に人であらずにいっそ酒壷になってしまいたいなあ。酒に染みてしまっていよう。

（第三巻・三四二、大伴旅人）

(11)　なかなかに何か知りけむ我が山に燃ゆる煙（けぶり）の外（よそ）に見ましを

〈訳〉どうして私はあの人と知り合ってしまったのでしょうか（かえって知り合わないほうがよかった）。私の山焼きの煙なら遠くから見ているだけでよかったのに、私自身に火がついてしまったのです。

（第十二巻・三〇三三、作者未詳）

(10)、(11)にも示したように、万葉集における「なかなかに」は、現代のナカナカの意味とは異なり、「中途半端に」、「なまじっか」、「かえって」などと訳されることが多い。古代後期になると、副詞の「なかなかに」から派生して、「なかなか」と、形容動詞の「なかなかなり」が現れた。意味としては、副詞の「なかなかに」、「なかなか」、形容動詞の「なかなかなり」ともに「中途半端に」として解釈されている。

その後、中世前期、中期にわたって、「なかなかに」から「なかなか」に統一され始める。それに伴って、「中途半端に」という意味を持つ状態副詞から「より一層のこと」という程度副詞に推移する傾向を示した。

中世中期になると、はっきりと打消に呼応するものが多く現れるようになり、呼応の副詞としての役割が確立されるにつれて、「なかなか」は陳述副詞としても認められるようになる。中世後期には動詞、形容詞、形容動詞に先行するものが認められ、現代語の「なかなか」とほぼ同じ意味と用法で用いられるようになった。

このようなことから、ナカナカは今でこそ、「予想した程度を上回る」というプラスの意味を持つが、本来、「中途半端に」というマイナスな意味を持った言葉であった。ナカナカが、見くびった評価を含み、丁(2009)で述べられているように、「褒めることへの保留が含まれ」ているように感じるのは、このように、元々マイナス評価をする語であったからではないかと考えられる。

2.4.その他の先行研究

工藤(1983)、森山(1985)、林(1996)の先行研究では、ナカナカを程度副詞としていること、また、森田(1989: 837)で、「人・物・事柄などが示す状態に対し、その度合いが相当なものであると受け止める気持ちを表す」という記述があること、飛田・浅田(1994: 382-383)の「程度が平均を上回っている様子を表す。物事の解決や目標達成に時間・労力や能力などを必要とする様子を表す」という記述があるということから、ナカナカの意味と用法を明らかにするためには「程度」、「予想」、「評価」の３つの視点は欠かせないとされる。

3.主張

本論文では、(12)で示す、ナカナカが否定形「～ない」と共起する用法と、(13)で示す、ナカナカが肯定文で用いられ、見くびった評価を含む用法に加え、(14)に示す、ナ

カナカが肯定文で用いられるが、見くびった評価を含まない新たなナカナカの用法があると考える。

(12)　ナカナカが否定形「～ない」と共起するとき、服部(1994)や、丁(2009)に「時間」という視点を加えて、ある事柄が実行されているであろうと期待・予想した時間が訪れても、その目標や結果まで至っていない状態を表す。

(13)　ナカナカが肯定文で用いられるとき、ナカナカと共起する語を R とした場合に、対象に対して、それほどでもないだろうと見くびって評価を下していたが、思いがけず R であった、という意味を持つ。

(14)　スポーツの試合やドラマなど、始まりと終わりがはっきりしている事柄の序盤で、「なかなかいいね」などと使うときには、ナカナカが肯定文で使われているにも関わらず、今までのナカナカの用法とは異なり、見くびった評価が生じない。

本論文では、副詞ナカナカの意味と用法を、(12)のような、否定形「～ない」と共起する場合、(13)のような、肯定文で使われ、見くびった評価を含む場合、(14)のような、肯定文で使われるが、見くびった評価を含まない場合の三つに分ける。次の章で、その分析を行う。

4.分析

4.1.否定形と共起するナカナカ

まず、一つ目の用法は、ナカナカが否定形と共起し、「なかなか X ない」の形で表されるものである。このとき、X は、話し手が期待、予想している事柄を表す。この用法におけるナカナカは、先行する語を強調したり、明確化したりする働きを持ち、陳述副詞としての働きを持つ。

服部(1994)や、丁(2009)では、ナカナカが否定形と共起する場合には、話し手が願う事態・状況の実現・実行が容易でない場合を表すとされているが、本論文では、以下のように考える。

(12)　ナカナカが否定形「～ない」と共起するとき、服部(1994)や、丁(2009)に「時間」という視点を加えて、ある事柄が実行されているであろうと期待・予想した時間が訪れても、その目標や結果まで至っていない状態を表す。

ナカナカが否定形「～ない」と共起する典型的な例として、次の(15)、(16)が挙げられる。

(15)　花子は、次の一手をなかなか決断できない。

(15)は、花子が、次の一手を決断できているであろうと予想した時間になっても、まだ決断できていないという状態を表す。

(16)　電車がなかなか来ない。

(16)は、本来なら電車が来ているであろうと予想していた時間になっても、まだ電車が来ていないという状態を表す。

(17)　祖父の病気がなかなか回復しない。

(17)は、祖父の病気が回復しているであろうと期待していた時期になっても、まだ回復していないという状況を表す。上述と同様に、以下の(18)も、ナカナカが否定形「～ない」と共起する典型的な例である。

(18) a. 今月の目標はなかなか達成しない。
b. 花子は、次の一手をなかなか決断できない。
c. お腹がいっぱいで、なかなか動けない。
d. 話してもなかなか分かってくれない。
e. 祖父の病気がなかなか回復しない。
f. 彼の話はなかなか理解できない。
g. このセミナーに参加したおかげで、普段なかなか聞けない話を聞くことができた。
h. このパン屋さんのフランスパンはいつも行列ができるほど人気で、なかなか手に入らないんだよ。
i. みんながなかなかできないことを、佐藤さんはいとも簡単にやってみせたので、先生はとても驚いていた。

また、次の(19a),(20a),(21a)は、ナカナカが言い切りの形になっており、一見否定形には見えない。しかし、それぞれ、(19b),(20b),(21b)のように、ナカナカのあとに「行きつかない」、「集まらない」、「進まない」という語が省略されていると考えられる。

(19) a. あの企画の具体化まではなかなかだ。
b. あの企画の具体化まではなかなか行きつかない。

(19)は、あの企画が、もう具体化しているであろうと期待されていた時間になっても、まだ具体化まで行きついていないという状態を表す。

(20) a. その事件に関する新しい情報はまだなかなか・・・。
b. その事件に関する新しい情報はまだなかなか集まらない。

(20)は、その事件に関する新しい情報が集まっているであろうと期待された時期になっても、まだ集まっていないという状況を表す。

(21) a. あそこの橋の復旧工事はまだなかなか・・・。
b. あそこの橋の復旧工事はまだなかなか進まない。

(21)は、橋の復旧工事が進んでいるであろうと予想された時期になっても、まだ進んでいないという状況を表す。このように、ナカナカが言い切りの形になっている場合でも、否定形「～ない」が省略されており、「時間」との関係を述べることができる。

また、ナカナカは(22)のように、助動詞の「ない」と共起する。

(22) a. お腹がいっぱいで、なかなか動けない。
b. 話してもなかなか分かってくれない。
c. 彼の話はなかなか理解できない。

一方で、(23)のような形容詞の「ない」とは基本的に共起しない。

(23) a. *このじゃがいもはなかなか大きくない。
b. *あそこのフランス料理はなかなかおいしくない。
c. *あの先生はなかなかかっこよくない。

(23)は、ナカナカが形容詞の「ない」と共に用いられており、(23)は全て容認されない。

しかし、(24)のような場合には、ナカナカが形容詞の「ない」と共起し、容認される。

(24) a. この実験ができる研究所はなかなかない。
b. これほど優秀な人ばかりが集まる状況はなかなかない。
c. こんなにおいしい料理を出すお店はなかなかない。

これらの例文(24)　は、次のように「ない」を「見つからない」と置き換えることができる。

(25)　a.　この実験ができる研究所はなかなか見つからない。
　　b.　こんなに優秀な人ばかりが集まる状況はなかなか見つからない。
　　c.　こんなにおいしい料理を出すお店はなかなか見つからない。

(25)は、すでに見つかっているであろうと期待・予想していた時間が訪れても、まだ見つからないという状況を表していると考えられ、この用法があてはまる。

また、次の(26)の、「侮る」、「見くびる」という動詞は、「人を軽くみてばかにする、軽蔑する、見下す」というマイナスの意味を持つ。

(26)　a.　彼はあれでなかなか侮れない。　[服部 1994:p.80, (14)]
　　b.　太郎はなかなか見くびれないやつだ。

「マイナス評価の語＋ない」という形は、肯定の意味を生み出すため、ナカナカが、見くびった評価を含んで肯定表現と共起する場合と同じの用法が用いられると考えられる。

4.2.肯定文と共起するナカナカ

4.2.1.と 4.2.2.では、ナカナカが肯定文で使われる用法を示す。4.2.1.では、評価の対象に対して抱いていた、見くびった評価を、思いがけず上回っていた場合に用いられる用法を分析し、4.2.2.では、見くびった評価を含まずに用いられる用法を分析している。

4.2.1.見くびった評価を含む例

(13)の用法は、対象に対して低く評価しているため、目下の者が目上の者に対してナカナカを使うと、失礼な印象を受ける。形容詞、形容動詞、状態を表す動詞に先行し、程度副詞としての働きを持つ。

(13)　ナカナカが肯定文で用いられるとき、ナカナカと共起する語を R とした場合に、対象に対して、それほどでもないだろうと見くびって評価を下していたが、思いがけず R であった、という意味を持つ。

次の(27)～(29)は、ナカナカが肯定文で用いられる例である。

(27)　　太郎の彼女はなかなかかわいい。

(27)では、あまりかわいさを期待していなかった太郎の彼女が、思いがけずかわいかった、という意味でナカナカを使っている。

(28)　　なかなかきれいな朝焼けを見ることができた。

(28)は、期待していた朝焼けよりもきれいな朝焼けを見られたことに対して、ナカナカを使っている。

(29)　　おまえもなかなか頑張っているじゃないか。

(29)では、「おまえ」に対して、そこまで頑張ると期待していなかったが、思いがけず頑張っている、という意味でナカナカを使っている。(27)〜(29)と同様の例として、以下(30)も挙げられる。

(30) a.　太郎の彼女はなかなかかわいい。
b.　ヤフードームはなかなか大きい。
c.　このデザインはなかなかいい。
d.　良いデザインがなかなか多い。
e.　三郎の娘はなかなかきれいな顔立ちをしている。
f.　おまえもなかなかやるなあ。
g.　この焼酎はなかなかいける。
h.　おまえもなかなか頑張っているじゃないか。
i.　この焼酎はなかなかいける。

また、次の例文(31)〜(33)は、「ナカナカの+名詞」という形をとる。このような形をとるとき、「ナカナカの」が形容詞的な働きをするため、あとには名詞が続く。

(31)　　彼はなかなかのやり手と見える。

(31)は、自分が「彼」に対して抱いていた評価以上に、「彼」が思いがけずやり手であったという状況を表す。

(32)　　佳苗の作る手料理はなかなかの味だ。

また、(32)では、佳苗が作る手料理の味に対して抱いていた評価以上に、佳苗の作る手料理が思いがけずおいしかったことをあらわす。

(33)　　この定食屋さんのごはんはなかなかの量がある。

(33)は、この定食屋さんのごはんの量が、それほど多いとは思っていなかったが、思いがけずごはんの量が多いという状況を表す。その他にも、「ナカナカの」が形容詞的な働きをするため、あとに名詞が続く用法は、(34)のような例が挙げられる。

(34) a.　なかなかの腕前を披露した。
b.　あのパスタ屋さんはなかなかの評判です。
c.　あいつのテニスもなかなかのもんやないか。
d.　おぬしもなかなかのわるよのう。
e.　なかなかの出来栄えに驚いた。
f.　東京まではなかなかの距離だ。

次の(35)は、ナカナカが何にも先行せず、言い切りの形になっている。(35)は、(36)から、ナカナカの後に続く語が省略されていると考えられる。(35a)では、a)から、「のもの」という表現が省略され、(35b)では、(36b)から「すごい」という表現が省略され、(35c)では、(36c)から、「いい」という表現が省略されていると考えられる。

(35) a.　この薬の効果はなかなかです。
b.　そのことわざを知っているとはなかなかですなあ。
c.　このデザインはなかなかだ。

(36) a.　この薬の効果はなかなかのものです。
b.　そのことわざを知っているとはなかなかすごいですなあ。
c.　このデザインはなかなかいい。

(35a)では、この薬が思いがけず効いたという状況、(35b)では、そのことわざを知らないであろうと評価していた相手が、思いがけずそのことわざを使ったという状況、(35c)では、このデザインが思いがけずよかったという状況をそれぞれ表している。どれも、対象を低くみて評価していることから、この用法があてはまる。

また、肯定文で用いられるナカナカは、基本的に、プラス評価をする語と共起し、思いがけず予想を上回っていたという意味を持つが、マイナス評価の語と共起する場合も、同じ意味で使われる。

(37)　　書庫の整理はなかなかめんどくさい。

(37)では、それほどめんどくさくないであろうと予想していた書庫の整理が、思いがけずめんどくさかった状態を表す。

(38)　　なかなか難しい問題を突きつけられたものだ。

(38)では、それほど難しいと思っていなかった問題が、思いがけず難しかった状態を表す。

(39)　　泣き喚く姪っ子をなだめるのは、なかなか大変だ。

(39)では、姪っ子をなだめるのはそれほど大変ではないだろうと予想していたが、思いがけず大変である状態を表している。マイナス評価の語と共起していても、(13)の意味で解釈できる。

また、次の(40)も、(37),(38),(39)と同様に、マイナス評価の語と共起しているが、思いがけず予想を上回っていた、という意味の他に、皮肉や嫌味がこめられている。

(40) a.　おまえってなかなか無責任なやつだな。
　　b.　毎回同じようなミスばかりして、彼女もなかなか困った人だ。
　　c.　あの男はなかなかの偏屈だからね。

(40a)では、予想していた以上に、思いがけず無責任であった、という状況、(40b)では、予想していた以上にミスが多く、思いがけず困った人であった、という状況、(40c)では、予想していた以上に思いがけずあの男が偏屈であったという状況をそれぞれ表わしている。

(41)ように、マイナス評価の語で容認することができない場合がある。

(41)　　*この焼きそばはなかなかまずい。

しかし、「まずいもの No.1 決定戦」というものが行われているときには、「まずい」という評価に対する程度を表すために、(42)の表現は容認できる。

(42)　　この焼きそばはなかなかまずい。

評価の対象に対して抱いていた評価や期待を、良い意味でも悪い意味でも、思いがけず上回っていた場合であれば、文脈や状況に応じて、ナカナカを使うことができる。この場合、この焼きそばに対して、そこまでまずくないであろうと予想していたが、思いがけずまずかった、という意味で使われている。

4.2.2.見くびった評価を含まない例

三つ目の用法は、ナカナカが肯定文で使われているが、見くびった評価を含まない、という、特殊な用法である。ナカナカが肯定文で使われる場合、服部(1994)では、「見くびれない程度に」、丁(2009)では、「予想や期待を上回る」という表現がされており、対象に対して見くびった評価をしているという前提がある。しかし、(14)で示すように、見くびった評価が含まれない用法もある。

(14) スポーツの試合やドラマなど、始まりと終わりがはっきりしている事柄の序盤で、「なかなかいいね」などと使うときには、ナカナカが肯定文で使われているにも関わらず、今までのナカナカの用法とは異なり、見くびった評価が生じない。

前節で示したように、ナカナカが肯定文で使われるときには、対象に対して低く評価しており、見くびっているという前提がある。しかし、プロ野球の試合で、(43)のように、解説者がピッチャーに向かって言うときには、見くびった評価が含まれていない。

(43) なかなかいいピッチングですね。

(43)は、プロ野球の解説者がピッチャーのピッチングを褒めている。選手が有名な選手であっても、無名な選手であっても(43)が使えることから、対象の評価は含まれていないと考えられる。また、野球の試合は、始まりと終わりが決まっており、1 回表から 3 回裏あたりで使われるのは自然だが、 9 回表でこの表現を使うと不自然になる。また、この用法は序盤でいいピッチングをしていたとしても、今後の展開がどうなるかは考慮に入れていない。

同様に、(44)のようにフィギュアスケートの試合で解説者が選手に向かって言うときや、(45)のように新しく始まったドラマを見て言うときにも、見くびった評価が含まれていない。

(44) なかなかいい滑りですね。

(44)は、フィギュアスケートの試合で、解説者が選手の滑りを褒めている。この場合も、

選手が有名な選手であっても、無名な選手であっても使えることから、見くびった評価は含まれていない。また、一人の選手あたりの演技の時間は、始まりと終わりがきちんと決まっており、演技の終盤でこのように言うと不自然になり、演技の序盤で使われると考えられる。この発言をしたあとの展開がどうなるかもわからない。

(45)　　このドラマ、なかなかおもしろいね。

(45)は、新しく始まったテレビドラマの序盤の回で、ドラマが面白いことを褒めている。有名な脚本家が手がけたドラマでも、無名の脚本化が手がけたドラマでも言えることから、見くびった評価は含まれていないと考えられる。また、テレビドラマは、初回と最終回が決まっており、その中でも、ドラマが始まったばかりの回で使うほうが自然である。さらに、この発言のあとにドラマがさらにおもしろくなるか、そうではないのかという今後の展開はわからない。

(43)～(45)に共通して言えることは、どれも、始まりと終わりがはっきりと決まっている事柄であり、その中でも、事柄の序盤に使われ、今後の展開がどうなるかわからないということである。

また、褒めるだけでなく、良くない状態について述べる場合にも使われる。(46),(47)は、(43),(44)をそれぞれ、選手の調子が悪い場合の解説者のコメントに変えたものである。

(46)　　なかなか投球が荒れているね。

(46)では、プロ野球の解説者が、ピッチャーの投球が荒れていることを指摘している。この場合でも、選手が有名か無名かに関わらず使えることから、見くびった評価は含まれていないと考えられる。また、野球の試合の序盤で使われ、このコメントを述べた際に投球が荒れていても、今後の展開がどうなるかはわからない。

(47)　　なかなかミスが目立ちますね。

(47)は、フィギュアスケートの試合で、解説者が選手のミスが多いことを指摘している。この場合も、選手が有名な選手であっても、無名な選手であっても使えることから、見くびった評価は含まれていない。また、演技の終盤でこのように言うと不自然になり、演技の序盤で使われると考えられる。この発言をしたあとの展開がどうなるかもわからない。

これらを、それぞれの事柄が終わったあとに使うと、以下のようになり、見くびった評価が含まれる、(13)の用法が使われる。

(48) a. なかなかいいピッチングでしたね。
b. なかなかいい滑りでしたね。
c. このドラマ、なかなかおもしろかったね。

(49) a. なかなか投球が荒れていたね。
b. なかなかミスが目立ったね。

(48a)では、予想していた以上に思いがけずピッチャーがいいピッチングをした、という状況、(48b)では、スケート選手が、予想していた以上に思いがけずいい演技をした、という状況、(48c)では、ドラマが予想した以上に思いがけずおもしろかった、という状況を表す。(49a)では、予想していた以上に、ピッチャーの投球が思いがけず荒れていた、という状況を表し、(49b)では、予想していた以上に、選手のミスが思いがけず多かった、という状況を表している。

つまり、例文(43)～(45)のように、事柄の序盤で、現在形の形で使われるときには、見くびった評価を含まないが、例文(48)、(49)のように、事柄が終わってから、過去形の形で使われるときには、見くびった評価を含むようになる。

以上のことから、始まりと終わりがはっきりと決まっている事柄であり、その中でも、事柄の序盤に使われ、今後の展開がどうなるかわからないという事象に、この用法は用いられる。

5.肯定文と否定文の両方で使われるナカナカ

これまで見て来た例文は、次の(50)～(53)のように、肯定文を否定文に、あるいは否定文を肯定文に変えると、容認されない。

(50) a. 今月の目標はなかなか達成しない。
b. *今月の目標はなかなか達成した。

(51) a. 電車がなかなか来ない。
b. *電車がなかなか来た。

(52) a. このデザインはなかなか良い。
b. *このデザインはなかなか良くない。

(53) a. おまえもなかなかやるなあ。

b.　*おまえもなかなかやらないなあ。

しかし、次の例文(54)は、同じ文章の肯定文と否定文でナカナカが用いられているが、否定文では(12)の用法が使われ、肯定文では(13)の用法が使われている。

(54)　a.　今年の新入社員は仕事がなかなかできない。
　　b.　今年の新入社員は仕事がなかなかできる。

(54a)では、ある程度働いて、仕事ができるであろうという時期になっても、新入社員の仕事ができるようにならない、という時間の経過との関係を表している。(54b)では、期待していた以上に新入社員の仕事ができるため、思いがけず仕事ができる、という状況を表している。(54a)では、ナカナカが時間との関係を表し、(54b)では、予想していた見くびった評価を思いがけず上回っていたことを表しているため、それぞれが、(12)と(13)の用法を使っていると。

(55)　a.　花子は人前でもなかなかしゃべらない。
　　b.　花子は人前でもなかなかしゃべる。

(55a)では、花子が人前に出てから、ある程度の時間が経っても、しゃべり出さないという意味を表している。(55b)では、予想していた以上に、花子が思いがけず人前でもぺらぺらとしゃべっているという状況を表している。(55a)では、ナカナカが時間との関係を表し、(55b)では、予想していた見くびった評価を思いがけず上回っていたことを表しているため、それぞれ、(12)と(13)の用法が使われている。。

(56)　a.　母はパソコンをなかなか使いこなせていない。
　　b.　母はパソコンをなかなか使いこなせている。

(56a)では、母がどれだけパソコンを扱っても使いこなせるようにならない、という時間との関係を表しており、(56b)では、母が予想していた以上に、思いがけずパソコンを使いこなせているという状況を表す。(56a)では、ナカナカが時間との関係を表し、(56b)では、予想していた見くびった評価を思いがけず上回っていたことを表しているため、それぞれ、(12)と(13)の用法が使われている。

(57)　a.　作業はなかなかうまくいかなかった。
　　b.　作業はなかなかうまくいった。

(57a)では、作業が、一定の時間が経過しても、本来期待していた目標まで至っていない状況を表しており、(57b)では、予想していた以上に、作業が思いがけずうまく進んだという状況を表している。(57a)では、ナカナカが時間との関係を表し、(57b)では、予想していた見くびった評価を思いがけず上回っていたことを表しているため、それぞれ、(12)と(13)の用法が使われている。

6.まとめ

本論文では、服部(1994)、丁(2009)の先行研究をもとに、副詞ナカナカの意味と用法を、三つに分類した。以下に、各章の内容を簡単にまとめる。

第 1 章では、副詞ナカナカの基本的な使い方を紹介し、ナカナカが否定形の「～ない」と共起する例、肯定文で使われる例を挙げた。

第 2 章では、まず、第 2 章第 1 節で、服部(1994)の先行研究で、ナカナカが、二つの意味と用法で使われていることを紹介した。次の第 2 章第 2 節でも、丁(2009)の先行研究で、ナカナカが二つの意味と用法で使われていることを紹介している。服部(1994)、丁(2009)のどちらにおいても、ナカナカは、否定表現と共起する場合と肯定表現と共起する場合によって、異なる意味と用法が使われていることが示されている。第 2 章第 3 節では、ナカナカには褒めることへの保留が含まれているように感じるのはなぜか、ということを、井手(1995)の先行研究をもとに、その意味の変遷から読み取った。第 2 章第 4 節では、その他の先行研究を挙げ、ナカナカの意味と用法を明らかにするためには「程度」、「予想」、「評価」、の３つの視点は欠かせないということを述べている。

第 3 章では、ナカナカの意味と用法の分類に関する筆者の主張をまとめている。否定形「～ない」と共起する場合には、先行研究とは異なった、「時間」という視点が加わり、ナカナカが肯定文で使われる場合には、見くびった評価をしているという前提があるものと、ナカナカが肯定文で使われているにも関わらす、見くびった評価をしているという前提がないものとに分けられることを示している。

第 4 章では、第 3 章で述べた主張を、さらに詳しく分析している。4.1.では、ナカナカが否定形「～ない」と共起するさまざまな例をあげ、4.2.では、ナカナカが肯定文で使われ、見くびった評価を含む際の例をあげている。4.3.では、ナカナカが肯定文で使われるが、見くびった評価を含まない例をあげている。

第 5 章では、同じ文章の肯定文でも否定文でもナカナカが使われているため、一見、同じ意味と用法のナカナカが使われているように見えるが、それぞれ別の意味と用法が使われているという例をあげている。

このように、本論文では、ナカナカという副詞に注目し、先行研究と比較しながら、三つの意味と用法に分類して分析した。その結果、否定形「～ない」と共起する場合には、新たに「時間」という視点を含むこと、肯定表現と共起する場合には、見くびった

評価を含む場合とそうでない場合とに分類できることが明らかになった。とくに、肯定表現と共起し、見くびった評価を含まない例は、今までの先行研究では触れられていなかったことであり、新しい発見ができたと考えている。今後も、日常で使われる副詞に注目し、さらなる探求に努めていきたい。

謝辞

本論文の執筆に当たり、担当教官の上山あゆみ先生にはご多忙の中、丁寧なご指導をいただきました。深く感謝の意を表します。また、貴重なアドバイスをしていただきました九州大学言語学研究室の王慶さん、東寺祐亮さんに心より感謝いたします。

参考文献

井手至(1955)『国語副詞の史的研究一―三』東京：中央図書出版社
工藤浩(1983)『程度副詞をめぐって』東京：明治書院
丁允英(2009)「副詞『なかなか』の意味・用法―日・韓の翻訳書を用いて―」『早稲田大学教育学部　学術研究（国語・国文学編）』57 号：13-28
服部匡(1994)「副詞『なかなか』の意味用法の分析」『言語学研究』13 号：79-90
林奈緒子(1996)「意味素性による程度副詞の記述」『筑波応用言語学研究』3 号：13-26
飛田良文・浅田秀子(1994)『現代副詞用法辞典』東京：東京堂出版
松村明(1988)『大辞林』東京：三省堂
森田良行(1989)『基礎日本語辞典』東京：角川書店
森山卓郎(1985)「程度副詞と動詞句」『京都教育大学国文学会』20 号：137-140